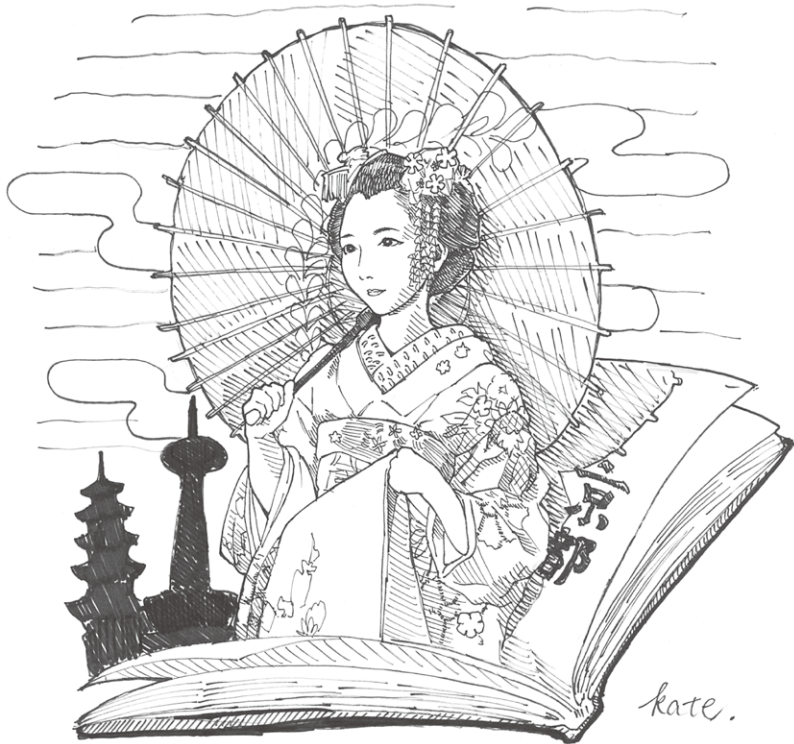




話題の本棚

ハンス・ロスリング他著『FACTFULNESS』

モーリス・アルヴァックス著、鈴木智之訳『記憶の社会的枠組み』

特集／京都

新刊コーナー／新書コーナー／私の本棚

〒606-8316

京都市左京区吉田二本松町 吉田南生協会館 2 階

Tel: 771-6211 / E-mail: teiyo@s-coop.net

綴葉HP: http://www.s-coop.net/about_seiyo/public_relations/



UNIV. 京大生協
CO-OP 綴葉編集委員会

あなたはどの程度「常識的」か？

FACTFULNESS (ファクトフルネス)

ハンス・ロスリング他著

上杉周作、関美和訳

日経BP



ビジネス書棚は玉石混濁である。その大部分は一度読んだら忘れてしまう「石」であろう。しかし、ときに極めて優れた書籍がこの分類で売られていることがある。一度読んだら、読む前と世界の見方がちょっと変わってしまうような本と遭遇することもあるのだ。発売以来半年間、売れ筋ランキングの上位に位置し続けている本書は紛れもなくそのような「玉」である。

本書は自己啓発書に分類されるのかもしれないが、本文の字は決して大きくなく、また参考文献リストや脚注もついていてほとんど大学の教科書と変わらない。ビジネス書の棚に並んでいることが奇妙に思えるほどである。そして、中心的な主張も驚くようなものではなく、ある意味極めて普通である。大げさな言葉で煽ることも何か奇妙な習慣を説くこともなく、ただ、事実に基づいた正しい判断を、と勧める。

しかし、それは誰もが当たり前にできていることではない。その非自明性を実感させてくれるのが本書の第一の効能である。例えば、本書の冒頭にあるクイズに答えてみると、自分がどれだけ「常識的な」事実を知らないことが痛感させられる。このクイズは次のペー

ジから挑戦できるので、ぜひ皆さんも試してみしてほしい。

・『ファクトフルネス』チンパンジークイズ
(<https://factquiz.chibicode.com/>)

恐らくは先入観のせいで、完全にランダムで答えるチンパンジー以下の正答率になるはずである。本当はよく知らないのに、なんとなく常識的にはそうだからという理由で判断してしまう。自覚があるならまだしも、事実を知らないということにも気づかないのだ。

本書の第二の効能は、そうした思考から逃れる方法を知ることができる点である。正しい判断を行うためには、人間生来の思考、すなわち「本能」のクセを知り、それに対処しなければならぬ。そうした落とし穴の数々と、その対処方法がタイプ別に解説される。例えば、何か問題が生じたときそれを誰かの責任として理解してしまう「犯人捜し本能」などは案外気づきにくい思考パターンである。どうしても誰が悪いのか、犯人を捜したくなってしまいが、そうではなく、原因やその背景のシステムに目を向けるべきなのだ。さらに、こうした注意事項を実践するためのアドバイスも紹介されているから、それを身に着ければ過度に悲観することも樂觀視することもなく、事実に基づいて判断できるようになる……はずだ。

本書は内容的にも物理的にも決して薄っぺらいベストセラーではない。「常識的には」という言葉に反発を覚えるあなたならきっと気に入るはずだ。そして、このセリフを吐いた覚えのある人はぜひ一読を。常識は良識ではないのだから。

(藤餅)

(四〇〇頁 税込一九四四円 1月刊)

《記憶が社会を支え、社会が記憶を再生産する。》

記憶の社会的枠組み

モーリス・アルヴァックス 著

鈴木智之訳

青弓社



——過ちは繰り返しません。

——原発の記憶を後世に。

——戦争の記憶が薄れていく。

こんな言葉を耳にする。記憶、それはえらく個人的なものだと思われているが、社会を営む上で私達は集団としての記憶を必要とする。思い出すとする時選択が行われ、語り合おうとする時自分達が何者であるかを確認する。そうした記憶を社会的枠組みで考察した研究者こそ百年前の社会学者モーリス・アルヴァックスである。

純粹で個人的な記憶……そんなものはない。

本書の内容は大きく二つに分けることが出来る。第一章から第四章までの個人的な記憶を批判する前半と、第五章から第七章までの家族・宗教・社会階級の集合的記憶を分析する後半だ。双方面白い内容だが、心理学・哲学で議論される個人的な記憶を徹底的に批判し集合的記憶だけで人間の記憶を記述する前半は、まさに夢を開かれる衝撃がある。

例えば第一章の「夢とイメージ記憶」。何故私たちは詳細に夢を思い出すことが出来ないのか。それは夢の中が社会的枠組みに収まらないからである。時間や場所などが共有されず、詳細に何が流れ

たのかを確認することが出来ない夢の中。体験は個人的なものでも思い出す行為には社会的な枠組みがある。そして現在このような環境にいるのか、どのような概念や語彙を用いているかで思い起こす記憶は変わってしまう。ゆえに個人の純粹な記憶は存在しない。

集合的記憶の並列する個人

こうした集合的記憶を考える時、読者は全ての過去を統合する巨大な一つの記憶を連想するかもしれない。しかしアルヴァックスの議論は、多くの集合的記憶が並列している個人を記述する。

例えば家族の記憶を他者と共有することは難しい。両親の性格、日々の暮らし、家の環境、使い古したあの家具。そうした細部の記憶は家族という集合的な記憶を形成し、他の社会的領域を相対化する力を持っている。宗教などを含め集合的記憶は全体を吸収する唯一の記憶のようなメカニズムではなく、むしろ異なる記憶が並列し相対的に存在する自律的世界として機能する。

ここで重要なのは、集合的記憶を引き継ぐことで、人は社会化するという分析とともに、そうした集合的記憶が現在の地点から改変されるという循環的視点である。私たちは社会的記憶を前提としながらも、そうした記憶を書き換える力を持っている。

「何を記憶し、何を忘れるのか」。それは自分たちが何者であり、何者であるべきなのかを捉える社会的行為と繋がる。思い起こされる過去は現在を変え、残すべき記憶が未来を変え、歴史や過去の語り方が話題となる昨今、本書は専門家だけでなく一般の人々にこそ読まれて欲しい一冊である。

(きもの)

(四一六頁 税込五一八四円 11月刊)

手のひらの京

綿矢りさ著
新潮文庫

『蹴りたい背中』や『勝手にふるえてろ』などの作品で知られる綿矢りさが、自身の故郷である京都を舞台に、悩み多き三姉妹の生活を描いた物語である。図書館勤めでどこかおっとり



としたところのある長女・綾香は、婚期を逃してしまったのではないかと強い焦りを感じている。社会人一年目で、ハキハキとした性格の次女の羽依は、上司との恋愛や周囲との人間関係に頭を抱えている。大学院生でしっかり者の三女・凜は、生まれ育った京都を離れ、東京での一人暮らしに強い憧れを抱いているが、そのことを両親はなかなか認めてくれない。

性格の異なる三姉妹がそれぞれに悶々とした日々を過ごしながらも、互いに助け合い支え合いながら、懸命に生きようとする若々しい姿が描かれている。果たして、綾香は自分に見合った結婚相手を見つけることができるのか？ 羽依の恋の行方はいかに？ 凜は東京での新しい生活を無事にスタートさせることができるのか？ テンポよいストーリーの展開に、最後まで目が離せない。

嵐山や府立植物園などの観光スポット、祇園祭や五山の送り火といったイベントを登場させるだけでなく、京都人による「いけず」までも「京都の伝統芸能」として描いてみせるのは、地元人ならではの視点である。私たちはそこに綿矢の地元への強い愛を見て取れるだけでなく、そこに描かれる京都の姿をリアルなものとして感じることができる。綾香や羽依、凜たちは一体どの辺りを歩いていたのだろうか？ ——そんなことに思いを馳せながら、京の街を散策してみるのも、またひとつ面白いかもしれない。(八雲)

(248頁 税込529円)

特集

京都

みなさんは京都にどんなイメージを抱いていますか。神社仏閣を始めとした観光スポットでしょうか、京大を中心とした学問の都市でしょうか、もしくは独特の食べ物や食べられるグルメスポットでしょうか。歴史がある京都にとってこれらはほんの一部のイメージでしかありません。日本でこれほど様々な角度から眺めることのできる都市はないのではないでしょうか。今回はそんな京都についての本を編集委員の関心に基づいて集めてみました。本企画を通して、みなさんの新しい京都像ができれば幸いです。

(c)2019



活動寫眞の女

浅田次郎著
集英社文庫

時代の転換点にいる時、僕らはその変化に躊躇ってしまう。消えつつある歴史の中で息を潜めるか、新時代の先端へと躍り出るか、立ち止まって変化を傍観しているか。本書の舞台は一九六九年の京都大学。学生運動が全盛のこの時代、目まぐるしく変わる常識の中で、若者たちは未来に戸惑っていた。



本書は、この時代を映画とテレビの転換点として描いていく。主人公の「僕」は大の日本映画好きで、大学に入って出来た友人「清家忠昭」と、古き良き日本映画について語り合っていた。京都は日本映画にとってのハリウッドであり、戦前から戦後にかけて多くの名作が京都の撮影所から飛び立っていった。そんな日本映画の聖地京都は、テレビの流行によって翳りを見せていく。

縮小していく撮影地でバイトする僕と清家は、一人の女優と出会ってしまう。あまりの美しさに息をのんだその女優は、三〇年前に死んだ亡霊だった。しかし清家は彼女を、亡霊と知りながらも恋してしまう。死者に恋をする友人を、引き留められない僕。価値観や常識が変わっていく時代の中で、ゲバルト棒を持つ者、ヒッピーになる者、ノンポリを気取る者もいた。誰が正解なのかわからない。ならばフィクションを愛するが故に、幽霊に恋する友人を、説得する術を持たないのだ。

京都は伝統を持つ街であるが故に、新しい時代の風に晒されて、失うものも多かった。僕らは何かを失くしてしまった、しかしそれが何かが分らない。古き良き時代に郷愁を覚えながらも、新時代の幕開けと向き合う学生たちの葛藤は、今を生きる僕らの悩みと通ずるものがあるかもしれない。（きもの）

(328頁 税込 605円)

きょうのできごと 増補新版

柴崎友香著
河出文庫

川の流れる町がなんとなく好きなわたしにとっては、京都を語るに鴨川は外せない。鴨川にまつわる思い出は、飛び石のように記憶に点在している。デルタで花火をしたり、ベンチで話しこんだり、夜中に友達と歌ったり、はたまた相撲をとったり。きっと京大生の何気ない日常のなかに、鴨川は流れている。



本書では、京都の大学院に進学する正道の引っ越し記念飲み会に参加した面々それぞれの「きょうのできごと」が丁寧に描かれる。自分のために用意されている、とまで思ったスカートが売り切れていて嘆く真紀。酔うと卵（それもおたまじゃくしの卵）のなかにいるような気分がする、と飲み会で話すけい。酔ってふすまに大量の直角二等辺三角形の穴をあける西山。正道は買い出しのため飲み会を抜けて、春の夜を自転車で走る。

前輪が水たまりで滑って、派手に転んだ。そのまま下宿に戻る気も起きず、川の方へと降りていく。昼間の雨で湿った地面に腰を下ろしたとき、電話が鳴った。相手は「引っ越し飲み会に誘ったけど来なかった人」。それ以上の言葉では説明されない女性と、夜の鴨川を見つめながらぼつりぼつりと言葉を交わす——「鴨川って、淀川とつながってるんやろ」「そうやったっけ」「たぶん。じゃあ、そこから船でわたしの家まで来れるのかな」。感傷的な描写はない。転んだ衝撃で凹んだ缶ビール。右手と右頬のかすり傷。名前のない関係の二人の、取りとめのない会話。川を横目に時間は流れる、淡々と。

話の筋もオチもないけれど、どこにでもある日常はここにしかない。あなたの「きょうのできごと」は、なんですか？（ミセ）

(224頁 税込 670円)

物語「京都学派」

—知識人たちの友情と葛藤

竹田篤司著 中公文庫

日本において同時期にこれだけ独創的な哲学者が一堂に会する時代は後にも先にもこのときだけだったと言われるように、京都学派は百花繚乱の個性咲き乱れる集団であった。では、なぜ同時期にこれほど個性豊かな面々が京都という地に集まっていたのだろうか。

本書は京都学派についての本だが、難解な理論は一切語られない。そこに展開されているのは、京都帝国大学設立から太平洋戦争終了までの京都学派関係者の書簡を引用しながら描かれる「物語」である。

京大設立時の東大というのは何よりも権威が大きな比重を占めていた。たとえば、内村鑑三不敬事件で有名な東大教授・井上哲次郎に表れているように、彼は古稀まで教授職を固持し、哲学界隈で最も権威ある日本哲学会の重鎮であり続けた。このように東大は権威を何よりも大切にしている場であり、こうした権威とは違った自由で闊達な学問を行わなければならないという要請を満たすために設立されたのが京大であった。そのために必要なのはどれだけユニークな人間を迎え入れるかということであり、そこで教授として迎え入れられたのが大学を出ていない一介の新聞記者であった東洋史の内藤湖南であり、東大のなかでも差別されていた「選科」の出身であった哲学の西田幾多郎だった。こうした権威を一切無視した人事により京大は後世にも類を見ないほどの個性豊かな学問が次々に生まれてくる場となったのだ。

しかし、今の京大にこれだけの自由と闊達さがあるだろうか。むしろ権威的になってはいないか。本書を読んでそんなことを考え直すのもいいかもしれない。(ういろ)

(398頁 税込 987円)



エトランゼのすべて

森田季節著

講談社

主人公の針塚圭介は、春から京都大学一回生。吉田南のサークル新歓の盛り上がりを目に、大学生活への期待を膨らませている。

……とくれば、勘のいい読者は「ああ、京大の（変

な）サークル小説モノね」と思うかもしれない。実際、その推測は外れていない。針塚圭介は「変」なサークル「京都観察会」と出会い、まるで魔女のような「会長」の不思議な魅力に引き込まれていく。いわく、「一寸先は闇だというのが、自分から闇に踏みこむとは思っていなかった」。活動は、カフェテリア・ルネで週に二日集まってご飯を食べること。サークルのメンバーは、自分と同じタイミングで入会した一回生の中道さん以外、全員四回生。一癖ふた癖あるメンバーと、謎を増してゆく会長に揉まれながら、春は洋服をそろえるために四条河原町、夏になれば夜中の吉田山で肝試しと、大学生的な京都生活を満喫する。

とはいえ描かれるのは、目新しくも風光明媚でもない平凡な京都である。「これまでわざわざ聖護院ハツ橋の角を右折して、東大路通から大学に入っていたのだが、京都ハンディクラフトセンターという外国人観光客用の土産物屋の横に裏道があることを発見した」といった、京大生のあるあるネタではあるが、なんてことのない描写が多い。しかし、こんな地味な発見の積み重ねこそが大学生的京都生活であろう、というのは言い過ぎだろうか。

入学したての方々はもちろん、すでに一回生の初々しさを失ったみなさんも、一度初心に戻り、新入生の目で京都を楽しんでみてはいかがだろうか。(投稿・のし梅)

(277頁 税込 1296円)



民衆と天皇

坂田聡・吉岡拓著
高志書院

本特集のテーマは京都であるが、そもそも京都の定義ほど難しいものはない。京都が嫌いな京都人による京都本のブレイクはなお記憶に新しいが、平安京の条坊の中でも御土居堀の中でもない京大という場所でそれを考えることにそれは自体に意味がある。

本書『民衆と天皇』の舞台は京都市の中の丹波国——旧京北町の歴史を中世の禁裏領から二〇世紀まで通時的に探った本である。勤王農兵隊の山国隊は著名だが、著者二人の民衆史よりの目線に立脚した歴史叙述が見せる様相はなかなかシニカルである。

住民にとって天皇や朝廷という存在は崇めるものでも抵抗するものでも、隣近所に住む「天皇はん」でもなく、家の存続と隆盛のために冷徹に利用するものであった。官職名を勝手に名乗るのは自家の特権を主張するため、禁裏御料編入を望むのは税負担を軽減するため。読者お楽しみの山国隊についても名乗りや由緒などで特権を得ようとし、戦後士族身分編入を求めるような百姓上層のある種のエゴイズムが叙述され、ナショナリズム以前の近世的勤王の心性に近代人の我々を分け入らせる。総力戦での戦死者と勤王の関係について、国策に忠実であった住民から強引に「葛藤」を引き出してしまった感もあるが、それはむしろ後続に託されたテーマともいえるだろう。

お家と郷土のために利用するものとしての天皇像は京都という土地が持つ磁場を「京都もの」より一層鮮烈に切り取っている。旧京北町とは異なり洛中から目と鼻の先とはいえ、同じく京都ではない、京大の歴史性を考えるよすがともしたい。

(投稿・とうこ)
(223頁 税込2700円)



京都

林屋辰三郎著
岩波新書

観光だけなら気づきにくい、京都に住む、あるいは通うようになると実感できることがある。それは、この街の変化である。通っても、そこを行き交う人々の様子も年々変わってゆく。名所旧跡こそ昔日の姿を留めるけれども、町家や古い商店などは建て替えられて徐々に減っている。

京都がどれほど変化したのかは、半世紀前に刊行されたガイドブックである本書を開けば明らかである。巻頭の空撮写真を見ると、街並みがすっかり変わってしまったことが分かる。また、名所を紹介する図版に写りこんだ日常風景には、今や失われたものも多い。主な内容としては地域・時代別に京都の歴史を紹介しつつ、名所などの案内を行う本書だが、現代の目からしてまず興味深いのはこの点である。

しかし、本書の真価は図版ではなく、本文にある。京都のどの名所が面白いかという観光情報の紹介ではなく、そのコンテキストを解説してくれるからだ。個々の建物や施設の見どころなどではなく、ある地域が京都の歴史において果たした役割を詳説している。それゆえに、読者は地域の特性を背景として、それぞれの名所のあり方を理解することができる。こうした事情は時代が変化しても変わらないものであるから、今読んでも決して古びない一冊となっている。

情報量が多く、観光には使えないかもしれないが、本学の学生にとっては面白い一冊である。京都がまだ目新しい入学当初とこの街に慣れ切った卒業時では読んだ感想も異なるだろう。ぜひ、二度読んで自身の変化も感じてみてほしい。

(蔵餅)
(257頁 税込950円)



新刊コーナー

カムパネルラ

山田正紀著
創元SF文庫

気がつく、「ぼく」はジョバンニになっており、そして警察に追われていた——カムパネルラ殺書の容疑者として。本書は宮沢賢治の『銀河鉄道の夜』を下敷きとした「ぼく」(ジョバンニ)が主人公の物語である。

主人公は「史実と異なる」昭和八年の世界に飛び、現実世界とは異なる内容の『銀河鉄道の夜』の原稿を発見する。そしてその物語のズレが「世界線」のズレとなっていることに気づく。ジョバンニとなった主人公は、カムパネルラ殺人事件に巻き込まれながら、大きな問いに対峙していく。すなわち「カムパネルラは誰なのか」、そして「カムパネルラとは何なのか」……?

本作でカムパネルラは「二つの」概念、あるいは「思想」として描かれている。その思想とは、「僕はもう、あのさそりのよう

にほんとうにみんなの幸いのためならば僕の中からだんか、百べん灼いてもかまわない」という「蠍の火」のごとき自己犠牲の精神だ。その「賢治の「思想」のいわば体现者」たるカムパネルラの死の意味を理解したとき、主人公はカムパネルラとの決別を選ぶ。

『銀河鉄道の夜』は幼少期に一度読んでいたが、本書をきっかけに再度手に取り始めた。本書を片手に再び銀河鉄道に乗り込んだとき、その車窓からは違った景色が見えるかもしれない。それは星々の光だろうか。それとも生命の光だろうか。銀河鉄道の旅は、まだ終わらない。

(三七五頁 税込九九四円 2月刊)

詩を書くってどんなこと?

若松英輔著
平凡社

孤独に言葉を添えたいならば、詩を書いてみるとい



切なる瞬間を留めたいならば、詩を書いてみるとい

誠実な心情を育みたいならば、詩を書いて

みるといい。

少しの気恥ずかしさにうろたえながら……

心が濁流に吞まれる思春期に、一片の詩を編んでみる。形のなかった葛藤に輪郭が与えられ、悩んでいる自分自身が紙面に浮かぶ。詩を書くこと、それは言葉を使えればすぐに始められる芸術であり、情報に吞まれる中で自身を省みる瞑想の行である。

本書は詩人への招待状である。名作を紹介し、詩の楽しさを伝える入門書は数多あれど、本書ほど「何故詩を書くことが必要なのか」を教えてくれる本はない。その裏側には、今私たちが誠実に言葉を使えない背景がある。

反射的に言葉を用い、コピペのように他人の言葉を使ってしまう環境の中で、拙くても未熟でも、正面から心と向き合う詩という表現が、言葉の深遠さを教えてくれる。

「人がいちばんつらいとき、そばにいるのは人間ではなく、言葉です。」

生きることの楽しみを忘れた時、詩は失くした思い出を拾ってくれるかもしれない。大切な人を失った時、最初の慰みは自分が書いた言葉かもしれない。詩を書くこと、それは鈍感になった心の愁しみを、美しみを、再び鋭敏にさせる営みである。

(三二二頁 税込一五二二円 3月刊)

学問からの手紙

宮野公樹著

小学館

本書は、京都大

学の学際融合教育

研究推進センター

に所属している著

者による、学問に

関する理論・実践を扱った著作である。

一章では主として大学論を、二章では本書

の主眼となる学問論が展開され、三章では著

者が携わる実践についての紹介や解説がなさ

れている。

ポップな表紙とは裏腹に、「研究」と「学

問」と「趣味」はどう違つかという問いや、

「異分野融合」「基礎研究」というスローガン

の孕む問題など、本書の論じるテーマはいず

れも重い。

これらの著者の議論から明らかにするのは、

学問に携わる、「コトバ」を大事にすべき学

者達が、それを蔑ろにしてきたという事実で

ある。学者は官僚や政治家の無理解を嘆きが

ちだが、学者の側にも反省すべき面があると

言わざるを得ない。

三章で著者が紹介する取り組み事例は、



「学問」と真摯に向き合う著者ならではのとい
うべきものはかりである。評者もいくつかの
イベントに参加したことがあるが、文字だけ
では伝わらない熱気や雰囲気もある。読者に
は、実際に参加することもお勧めしたい。

本書で繰り返し強調されているが「学問」
は大学の占有物ではない。この意味で、本書
の「宛先」は「学問」を必要とする、全ての
人類である。

読後、自分自身の問い直しを迫られるこ
とになる。本書という「手紙」が多くのの人々
に届くことを望んでやまない。(投稿・鮎池)

(二四頁 税込一五二円 3月刊)

波紋と螺旋とフィボナッチ

近藤滋著

角川ソフィア文庫

科学に関する本

には大きく分けて

二種類がある。一

つは専門家向けの

書籍、もう一つは

一般向けの解説書である。前者は正確である

が誰もが楽しめるものではない、後者は興味

深いがなにかはぐらかされている気がする。



正確であり、しかも面白い解説書である本書
は例外的であろう。

生物の形や模様がどのようにできるかを解
説することが本書の主な内容である。本書で
扱われる具体例は誰にでもなじみ深いもので
ある。貝殻はなぜそのような形なのか。シマ
ウマの縞、魚の模様、指紋といったパターン
はどのようにできるのか。こうした素朴だが
難しい疑問に、数理的な観点から解答してい
く。これは確かに数学による説明であるが、
図なども用いており、だれでもそれほど困難
なく理解できるだろう。特に、植物の形とフ
イボナッチ数列との関係について述べた一節
は必見である。「数学の神秘」を取り除いて
説明してゆく流れは鮮やかだ。こうした「本
筋」はもちろん、著者の研究を語ったエッセ
イや所々に挿入されるコラムも非常に面白い。
京大医化学教室所属であった著者が、こっそ
りと実験をして魚の模様がチューリングパタ
ーンと呼ばれるものの一例であると示すまで
の経緯は読んでいて引き込まれる。

比較的しっかりとした解説のある本だが、
著者の語り口もあいまって気負わずに読める。
科学の面白さだけではなく、謎を解明するこ
という研究の醍醐味も体感させてくれる一冊で
ある。

(二〇四頁 税込一〇三六円 3月刊)

(藤餅)

今からはじめる哲学入門

戸田剛文編

京都大学学術出版会

難解で得体の知

れない学問、あな
たは哲学に対して
そんな印象を抱い
ていないだろうか。



確かに哲学専攻の私でさえ時にこの界限の人々が何をしたいのか理解できないことがある。けれども彼らは遠い惑星からやってきたエイリアンなんかではない。ちょうど仕事や趣味のことで頭がいっぱいになる人のように、彼らも特定の見方や考え方から離れられなくなった捕らわれ人に過ぎないのである。

本書では計八人の論者によって芸術・ペクト・宗教など比較的身近なものから因果・言語・存在など伝統的な哲学の問いまで多種多様なテーマが扱われている。読者は彼らがいかにして問いに取り憑かれ、日常をまったく異なる仕方で眺めるようになったのかを見いだすだろう。第一章を担当している論者は芸術祭という社会現象のなかに、もしくは異性の美貌に心惹かれるという些細な一面のなかにさえ、プラトン以来の美学の遍歴を読み

取る。また別の論者は愛犬のちょっとした振る舞いを気にしすぎて遂には動物倫理の問題にまで発展させる。どのテーマにおいても問いの端緒からきちんと描かれているため、無理なく世界観に入り込むことができる。

もしなかに気になったテーマがあれば、章末に添えられた参考図書で問いをさらに追求すると良いだろう。その時すでにあなたは知らず知らずのうちに哲学を始めている。本書を読めば、エイリアンと思われていた哲学者もきっと身近な一人の人間として感じられてくるに違いない。

(投稿・三ツ葉)
(二五二頁 税込一九四四円 2月刊)

デカルト入門講義

富田恭彦著

ちくま学芸文庫



「我思う、ゆえに我あり」。古代ギリシャ以来連綿とつづく西洋哲学の歴史の中で、こ

れほどインパクトのある言葉も珍しい。他でもない、本書のタイトルに掲げられた哲学者ルネ・デカルトが、「方法的懐疑」の末に切

り開いた新境地を表す言葉である。

本書は、かつて本学の人間・環境学研究科の研究科長を務めた富田恭彦によるデカルト哲学への入門書である。デカルトがどのような人生を歩んだのかを、当時の世界情勢を踏まえながら概観したのち、かの「方法的懐疑」の態度が現れている彼の名著「省察」における議論に深く迫っていく。

学問が探究するための土台となる「絶対確実な知識」とは一体どのようなものなのか。諸学の基礎となる「第一哲学」に向けられるこの問いに、デカルトは立ち向かった。感覚による知識も数学による知識も絶対的ではないという「懐疑」の末にたどり着いたのは、疑う「心」としての私の存在だけは疑い得ない、という発想の転換であった。デカルトによるこの議論はやがて、後世の哲学的議論へと大きな影響を及ぼしていくこととなる。

原語での表記やその読み方が併記されているなど、もともとこの専門がデカルトであった(卒業論文のテーマでもあったそうだ)富田の並々ならぬ熱意が要所要所に感じられる。あるいは、富田のこの情熱的な姿勢は、絶対確実な知識を求める基盤にどこまでも潔癖であったデカルトの熱意に、どこかで通じ合っているのかもしれない。

(八雲)
(三三六頁 税込二二九六円 2月刊)

基礎づけるとは何か

ジル・ドゥルーズ著
國分功一 郎他編訳
ちくま学芸文庫

ジル・ドゥルーズ。現代思想を嗜んだことのある人なら耳にする名前である。バルクソンの「生の哲学」を二〇世紀において再検討し、「リゾーム」や「潜在性」などの概念と共に人間の生きるという営みを肯定的に捉えた彼の哲学はその死後二〇年余り経った現在も変わらず研究対象であり続けている。



本書は彼の行なった講義その他、初期の論者を新訳しまとめたものである。本書のタイトルにもなっている講義はリゼでのものだが、哲学の根本をなす「考えること」の前提となる部分を人は如何にして形作ってきたのかという問いを掘り下げる。

人は社会的動物であるが故に自らの行動目的としての欲望を自然な形ではなく社会的規範に則った形で充足させる。この命題についてドゥルーズは哲学の徒として身近な「考える」という行動を例にとり、主体性という観点からカント・ヒューム等の超越論的・経験

論的立場を比較しつつ哲学史を踏まえて考察を進める。

自然・社会とそこに置かれた人間というテーマは続くルソーについての講義にも持ち越される。ここではルソーとホッブズが比較され、ルソーの唱えた社会契約と自由意志との関係について分析が行われる。

ここに現れる若き日のドゥルーズは哲學家としての顔を持つ。本書は現在もなお研究者を魅了する彼の思想を基礎づけるものとして参照されるべきであろう。

(三七四頁 税込一四〇四円 11月刊)

新版 差別論 偏見理論批判

佐藤裕著
明石書店



差別の告発が不毛な反発と糾弾の激化に帰着するのを度々目にするにつけて思わざるをえないのは、そもそも「差別とは何か」と根本から問い直されねばならないということだ。社会学者が差別行為一般について論じた本書

こそ、この問いに正面から応答した理論書として真っ先に参照されるべきであろう。

著者は差別論を組み立てるにあたってそれを、社会的カテゴリーによる不当に異なった扱いを不平等という権利侵害として捉える人権論から峻別するところから出発する。人権論が扱われる客体間の差異を問題とするのに対し、差別論は差別の主体と客体の関係の非対称性に着目する。さらに著者はそれを二者関係ではなく、共犯者という第三項を不可欠な契機とする三者関係として捉える。問題の混乱の元である差別の心理(偏見)への還元に限ることなく、あくまで行為の次元において、差別者が共犯者を同化すると同時に被差別者を他者化し排除する過程を詳細に分析する本書の明快な差別論は、非常に啓発的な様々な場面に応用可能なものだ。

本書後半では筒井康隆の「無人警察」や石原慎太郎の「三国人」発言、林道義の父性・母性論といった事例における差別性が丁寧に議論される。新版では加えて安倍晋三の「こんな人たち」発言がとりあげられる。このような一見差別とは思われないような事例において、安倍の発言と同期する指差しと視線についての精緻な分析に基づき、差別性を指摘する議論は特に読みごたえがある。(霊人)

(二四〇頁 税込三〇二四円 12月刊)

京大的アホがなぜ必要か
カオスな世界の生存戦略

酒井敏著 集英社新書

常識にとられないことをやってみるのは重要だと言われるが、なぜ重要なのか考えてみたことがあるだろうか。著者にとってはそれがこれからの「カオス」な世界を生きる術になるからだと言っていることか。

本書は、「京大変人講座」を開講した著者がこれからの世界にとってなぜ「京大的アホ」が必要になってくるのかを説いた一冊である。ここで言う「アホ」とは「賢い」の反対語ではなく、常識にとられずにまことでないことをやることを意味する。では、そうした「アホ」が必要になるのはなぜか。それはこの世界が、因果論的な証明が成立しない「カオス」であると認定されたからである。人間には全てを常識に当てはめて説明したい願望があるが、それは「カオス」の前では無意味となったのである。こうした予測不能な世界だからこそ、常識にとられずに「アホ」なことをやってみるのがこれからの世界を生きるのに重要になるのだ。

「アホ」なことをやろう。それが未来を拓く一助となるかもしれない。(ついでつ)

(二五六頁 税込九二九円 3月刊)

内閣総理大臣の沖縄問題

塩田潮著
平凡社新書

米軍基地問題をめぐって、政府が、戦後、沖縄県にどのように向き合ってきたか、この一冊で概観できる。この問題について考えたいが、何から読んでいいかわからないという方にお薦めの一冊である。

本書は、回顧録をはじめ政治家の様々な本の参照・引用で構成され、たしかに新規性は乏しい。また、タイトルからもわかるように沖縄の民衆から見た戦後史は抜け落ちている。しかし、引用・参照されている本の中で気になったものを読んでみる、などの形で考えを深めていくきっかけとなるだろう。

一九四六年の吉田首相から現在の安倍首相までの舞台裏が描かれるが、沖縄復帰時のドル円交換の際、当時の佐藤首相が沖縄の要請に応え、立場の違いを超え、アメリカの頭越しで行った「ドル・チェック」の舞台裏が特に印象深い。それはかつての「保守本流」が持っていた懐の深さ、したたかさ、底知れぬ恐ろしさである。本書は、現政権と異なる「保守」が、かつて日本に存在したことを読者に気づかせるだろう。(投稿・I T)

(三〇八頁 税込九七二円 1月刊)

ユダヤ人とユダヤ教

市川裕著
岩波新書

世界史を振り返る際、キーワードとなる「ユダヤ人」という言葉。しかしこの「ユダヤ人」という表現そのものに疑問を抱いたことはあるだろうか。宗教が民族か、私たちが自明視しているこの表現は、本質的に捉え難さを含んでいる。

本書は、「ユダヤ」にまつわる諸事象を歴史・信仰・学問・社会という観点から論じたものである。これらの視点から眺めた時、民族が宗教かと一義的には断定出来ない「ユダヤ」の内奥を垣間見ることが出来るだろう。

イスラム世界におけるユダヤの歴史や、思想と経済活動などの社会実践が密接に結びついていることの克明な描写は、固定観念を説得的に打ち壊してくれる。加えて、経済的利益関係に翻弄されながら、利用され迫害されてきたユダヤの人々の歴史や物の捉え方は、現代社会が直面している排外主義の諸問題をも思い起こさせる。今まで捉え難くあった「ユダヤ」を明瞭に整理した本書は、今後のスタンダードとなるべきものだと言える。

(投稿・昌平)

(二八九頁 税込八四二円 1月刊)

私というモードは今、

春になったから衣替えをしよう、藏っておいた去年の服を引っ張り出して着る。街ですれ違う人の服はなんだか自分のと違っておしゃれに見える。どこが違うんだろう。雑誌やインターネットで流行りのコーディネート例を探す。でも自分が実際に着てみて似合うのだろうか。そもそも自分は何故コーディネートなどに気にするのだろうか。そんな疑問の糸を解きたくて本を読んできた。

アイデンティティの表現

ファッションに関しての様々な考察を概観するのに適した本が『ファッションと哲学』（フィルムアート社）である。マルクスに始まりフロイト・ジンメルからデリダ・ボードリヤールに至るまで多くの哲学者によってなされたファッション論を各哲学者に焦点を当てて分析する論叢集である本書はいわばファッション論史ともいえるだろう。そんな本書の中でファッションの背後にある欲望が言明される：

「人は他の誰かのようにでありたいという欲望と、他の誰かと違っていたいという欲望に同時に突き動かされている」。

本来、例えば貴族階級などある階層への所属を示す記号として機能した装いが階級闘争を経て特にブルジョワの自己主張としてのファッションへと生まれ変わった。それはやがて社会の中での個人を定めるようになる。ファッションを纏うことで人は社会における自分の立ち位置とアイデンティティを確立させる。しかし、例えばハンヤミンの『複製技術時代の芸術作品』のように既製服が一般的になるにつれてファッションは別の一面を見せる。



アイデンティティからイメージへ

ファッションに付随する意味の変化が顕著にわかる書物がバルトの『モード論集』（ちくま学芸文庫）かもしれない。ロゴや広告によって衣服には新たなコンテクストが付随し、それを纏う人もまたそのコンテクストを取り込んでファッションを形作る。それは単一のアイデンティティという枠を超えてイメージを先行させる。それが発展すればファッションによって人はイメージという形で他のアイデンティティを身に付けることができるという逆転の発想に至る。京都ならば観光客の着物体験や花魁変身体験などがその一例かもしれない。それが極限にまぐくと、ボードリヤールの語るように最早イメージを欲望するしかなく、実体が得られずに疲弊する。「着たい服が見つからない」という悩みはその表れなのかもしれない。

そんなファッションを実際に身に纏うことに關して語るのが鷲田清一の『モードの迷宮』（ちくま学芸文庫）である。ここではファッションを身につけることでその服装のもたらすイメージとそれによって隠されて



れている相反するイメージの両者が喚起されてしまふ、というファッションの持つ矛盾した性質が述べられる。衣服を着ることで「私」は自然な姿を失う。そして、「服装を変えれば私は別の《私》になりける。しかし、こうした形で《私》の変換は《私》が消失していく過程でもないだろうか」。

鏡の前で服を取っ替え引っ替えする時いつの間にか服を着た自分ではなく服装だけ見てはいないか、少し恐ろしくなった。（ねい）

福本イズムという盲点

現代日本の社会構成体が論じられる際、その議論の根本は未だに一九三〇年代の日本資本主義論争に規定されているといっても過言ではあるまい。当時の議論がそのまま適用できなくとも、講座派・労農派という対立軸は依然として有用である。しかし、それに焦点を当てすぎると、逆に覆い隠されかねない盲点が存在する。この盲点を闡明するには、さらに一〇年ほど遡らねばならない。

山川イズムから福本イズムを経て「二七年テーゼ」へ

一九三二年七月に日本共産党が創立されるとほぼ同時に、その中心人物の一人、山川均は「無産階級運動の方向転換」(『アナ・ボル論争』所収)を発表した。無産階級運動は政治・経済両面において無産階級大衆から乖離せずに、彼らの生活要求に即応して闘争しなければならぬと説くこの論文は大きな反響を呼んだが、翌年の弾圧を契機に山川らは非合法の前衛党を時期尚早とし、解党する。

その後、ドイツ留学帰りの理論家、福本和夫の思想が共産党の再建を目指すビューローを席卷した。福本が山川イズムを、経済運動の「ズルズルベッタリ」な延長上に政治運動を位置つけた折衷主義にすぎないと批判するさまは『福本和夫初期著作集第二巻』で読むことができる。福本はレーニンの名著『なにをなすべきか』に基づき「分離結合論」、すなわち「結合する前に先ず、きれいに分離しなければならぬ」という党建設論を掲げ、理論闘争を重んじた。

二六年末に党は福本イズムの影響下で再建された。しかし畢竟、翌年コミンテルンが日本の指導者たちを招き、ブハーリンらが討議してつくった綱領的文書「二七年テーゼ」によって山川イズムと福本イズムの双方が批判され、党の指針は一変した。最新の公認党史

『日本共産党の八十年』にも福本イズムの「誤りは深刻」とある。

福本イズムの意義

初期マルクスに立脚した疎外論を唱えた福本の思想は、本格的なマルクス主義理論体系として日本で初めて自前に構築されたものであると同時に、コルシュやルカーチらの西欧マルクス主義と軌を一にする国際性を備えていた。コルシュが排除され、ルカーチが自己批判を迫られたのと同様に、福本イズムは葬られた。かくしてコミンテルンが掲げた「世界独裁」は各国共産党への独裁に帰結した。

その後、福本を批判した山川一派は労農派となり、戦後は社会党左派へと流れていく。コミンテルンからのテーゼを受け入れ続けた日本共産党は講座派と結びつく。冒頭に述べたように、この対立軸は今なお健在だ。二〇年代に葬り去られた福本イズムは、この対立軸から見れば盲点となるが、スターリン批判やルカーチらの再評価を経てやや復権を得たといえよう。たとえば『近代日本の批評Ⅰ』において柄谷行人らは福本を絶賛している。絶対的な他者としてのプロレタリアートとの関係において主体の変革を説く福本イズムが「大正」的な「ズルズルベッタリ」の心性を切断了かというのだ。

ちなみに、福本は山川を批判する以前からマルクス経済学者の河上肇を批判していた、これも重要なのだが、自伝『革命運動裸像』によれば、帰国直後に福本は京大大学院に籍を置こうと画策していたようだ。

結局実現しなかったものの、もしもそれが叶っていたら、後の河上との論争も異なる様相を呈していたかもしれない。



編集後記

約3年という長い年月。そんな長く務めてきた『綴葉』の編集委員を今月号限りで離れることになりました（ういろう）です。

この長い年月が物語っているように私にとって月に数冊の本を選書し、そしてそれを文章化するという作業は研究の合間に行われるルーティンの一部になっていました。ただ、ルーティンと言っても書評を書くということには楽しいというよりも苦しいことのほうが多かった気がします。どうしてもうまく文章化できなかったり、自分ではうまく書いたつもりでも伝わってなかったり、また文章の細かなミスがあったことに気づかずに提出してしまったりと苦難の連続でした。しかし、読者カードなどで読者の方が私の拙い書評をほめてくださるお褒めの言葉や、私の紹介した本を買って読んでみましたという感想があったときは非常に嬉しく、文章が下手な私でも編集委員をやっていてよかったと思える瞬間でした。どうもありがとうございました。

来月号からは私も『綴葉』に書いて編集するほうではなく、読むほうに関わっていく一読者となりたいと思っておりますので、よろしくお願いします。（ういろう）

当てよう！ 図書カード

5月31日が何の日かご存知でしょうか。この日は、カトリック教会の典礼暦において「聖母の訪問」と呼ばれる、受胎告知を受けたマリアが同じく身籠った親戚のエリサベトを訪れた出来事を記念する祝日です。では、この出来事について執筆した福音書記者は誰でしょうか。

1. マタイ
2. マルコ
3. ルカ
4. ヨハネ

（霊人）

《応募方法》読者カードに答えを書いて生協のひとことポストに入れてください（またはe-mail:teiyo@s-coop.net）。正解者の中から抽選で5名の方に図書カードを進呈いたします。締切りは6月15日です。

1・2月号の解答

1・2月号「日本より高い税率の国は？」の解答は、3. トルコでした。日本は世界と比較して低いほうなのがわかります。応募者15名中15名の方が正解でした。たくさんのご応募ありがとうございました。図書カードの当選者は、よっさんさん、Sosoさん、まるさん、名前忘れたさん、なかさん（順不同）です。おめでとうございます。（ういろう）

読者からひょうじ

○とてももなく忙しく心がすり切れそうな時にもわずかな時間でも本を読んで気分転換することのできっています。今後とも多彩な本をおすすめ下さい。（防災研・雪柳）

——新年度がいよいよスタートしました。年度の始まりは新しい仕事を任されたり、あるいは新しい環境に自分のペースがつかめなかったりして、なかなか「自分の時間」を作りにくいものですが、すきま時間を読書に充てて、自分の生活を充実したものにしていきたいですね。

○私は本を読むことは好きですが、あまり難しい本は読めないのです（笑）。小説を紹介する書評が増えると嬉しいです。

（時計台ショップ・ポポナン）

——難しい本にはチャレンジしにくいというお気持ち、哲学を専攻している私でもよく分かります。特に哲学の場合だと、「哲学」という響きだけで、敬遠されてしまうことも多いんですよね。ですが、厳しいタイトルや装丁とは裏腹に、内容は難しくなかった……ということもしばしばです。新しい季節に心機一転、難しそうな本にあえてチャレンジしてみるのがいいかもしれません。（八雲）